

# 前へ。



益城町木山仮設団地にて

## 長期にわたる支援、なぜ必要か。

最大震度7の地震が2回発生し、おびただしい回数の余震から、熊本地震は観測史上、極めて特異な大規模災害となりました。

発災から一年を迎えた今も多くの人々の生活や人生に影響を与え続けています。

現在も復興支援活動の最前線に立つ私たちYMCAは「復興の格差」という問題に気付きはじめています。

「がんばろう、熊本」を掛け声に、産業やインフラの復旧が急ピッチで進められるなかで、

一歩前に足を踏み出すことさえ難しい人々が多いことを忘れてはなりません。

このような人々が直面する課題の解決のためには、長期的な視点に立たなければならないものが少なくありません。

災害の前には見えにくかった課題やニーズが、災害後の時間の経過とともに、より深刻な形となって顕在化してくるからです。

あなたがもし、「私もなにか、力になりたい」と思っているなら、

どうぞYMCAのドアをノックしてください。一緒にできる活動が必ずあります。

わずかな歩幅でも被災した方々と一緒に前へ踏み出し、長い道のりを共に歩み続ける活動を、

熊本YMCAはこれからも続けていきます。

益城町

## 木山仮設団地を基点に、益城町での「面」の展開を目指す



建て替えが決まった益城町総合体育館

県内最大規模の人数を受け入れた益城町総合運動公園の避難所が昨年10月末に閉所。現在の益城町での活動の中心は木山仮設団地「地域支え合いセンター」の運営です。220戸からなる仮設団地には朝から職員が常駐し、住民の見守りや生活支援、交流の促進などを行っています。

阪神淡路大震災、東日本大震災での経験から、住民が長期にわたって仮設団地に住まざるを得ないケースを想定しておかなければなりません。そのため、「ヨコのつながり」による支援が必要です。具体的には、国内のYMCA・大学・NPOなどYMCAのネットワークを最大限活用し、時間の経過にあわせ、かつ「個」に寄り添った活動を長期にわたり行っていく支援の形です。

さらに、木山仮設団地で得た経験を、常駐の見守りスタッフがない中小の仮設団地で活かすことも求められます。

木山から近いながみねファミリー、東部、むさしの各YMCAと地域支え合いセンターが一体となり、さらに「ヨコのつながり」によって益城町全体へ支援の輪を広げていく。これが益城町でYMCAが目指す長期的視野に立った支援です。



3月12日(日)に仮設団地で開催したミニ祭り

御船町

## 5つの仮設団地「ひとつのコミュ



御船町スポーツセンター

木山仮設団地と同じく、熊本YMCAは御船町地域支え合いセンターの運営を行っています。特徴は、5カ所に分かれた仮設団地地区

の見守り活動をひとつの支え合いセンターで行っていることです。

「地震から一年も経つのに家屋の解体作業ができない」「自ら被災しながら介護の問題を抱えている」「地震後、健康状態がよくない」など住民が抱える課題は様々です。ここでも必要なのは「ヨコのつながり」。課題を解決していくためには連携が不可欠です。中央、みなみ、上通の各YMCAと地域支え合いセンターが一緒になって住民の細かいニーズを聞き取り、個別の課題により丁寧に対応していくことを目指しています。



# ともに手を

## 仮設に入り、皆ほっとしたものの…互いに支え合うコミュニティ

益城町の木山仮設団地では220世帯約500名が生活しています。東・北・西のエリアに自治会があり、月に1回合同の会合を開いています。入居しているのは、避難所で生活していた人、車中泊をしていた人など様々。それまでの気遣いの絶えない環境から仮設住宅へ移り、プライベートな空間が確保されて住民は一様にほっとしました。気持ちに少し余裕が生まれたことで、住民の間にも互いに支え合おうという意識が芽生えたようでした。

一方、仮設団地内の駐車場不足や、子どもたちが遊び場がなくストレスを抱えているといった課題もあります。これからの生活に不安を感じている人がほとんどです。住民の力だけでは、仮設住宅で暮らす人たちの状況を把握し、見守り続けることは到底できません。ですから、日常

的に住民に声をかけ、子どもたちと接して下さっている地域支え合いセンターのYMCAスタッフの存在はとてもありがたいものです。

自治会費を集めずに自立した自治会運営を行おうと、廃品回収を始めました。今後、イベントの実施など、自分たちの手でできることを自治会を中心に考えていきます。仮設住宅で暮らす人たちが自立へ向けて準備が整えられるように、住民同士で、またYMCAと一緒に話し合いや協力を進めていきたいと思っています。



木山仮設団地東自治会会長 荒瀬 芳昭さん

## 次の一步を踏み出せるよ 住民の声に耳を傾け、寄り

日本障害フォーラム(JDF)は障がいのある方を支援する団体です。熊本地震では、全国から集まっていた支援団体が撤収し始めた時期に、避難所だった益城町総合体育館で活動を始めました。

避難所の閉所後も、益城町木山や御船町の仮設団地で地域支え合いセンターを運営するYMCAと引き続き連携し、仮設住宅の巡回など見守り活動を行ってきました。

急に「困ったことはありませんか」と尋ねても、住民から答えは返って来ません。日頃の会話の中で、身体の調子がよくない、最近あの人をあまり見かけないなど、状況がうかがい知れることがあります。そのため、普段の関わりがとても大切だと感じています。孤立化を防ごうと、一人ひとりへ声かけを行いながらサロン活動な

## 地区を 「コミュニティ」に

また、同町内には熊本YMCAが管理運営する御船町スポーツセンターがあります。施設は段階的に修復され、温水プールなど住民の健康増進拠点や集いの場所としての機能が回復しつつあります。

5カ所に分かれている仮設団地をひとつのコミュニティにし、住民自治のサポートを長期にわたって行っていくために、このような立地上の要素を利点にして、活動にYMCAのネットワークの息を吹き込んでいくことを重要かつ当面の目標としています。



みんなの家(集会場)で毎週開かれるサロン

## 阿蘇地域

## 阿蘇YMCAはボランティアセンターを継続 5つの仮設団地と連携するYMCA保育園



南阿蘇の崩落現場

阿蘇地域は、熊本市から大分県方面に伸びる国道57号線の間際に位置しています。しかし、国道とJR豊肥本線は地滑りによって広範囲で崩壊、復旧には数年を要すると言われていいます。産業は大きな打撃を受け、観光や農業に長年携わってきた人が被災に加え、生業をあきらめざるを得ないというケースも発生しています。

阿蘇地域では夏までに、のべ数百名のボランティアが必要と見積もられていますが、時間の経過とともにボランティアの数は減り続けています。辛くも被災を免れた阿蘇YMCAは①ボランティア情報の発信、②復興支援活動に参加するボランティアが宿泊するベースキャンプ、③ボランティアの養成という主に3つの役割を担っています。

また熊本YMCAは阿蘇市に4つの保育園を有し、それぞれの保育園が阿蘇市内にある5つの仮設団地と連携しています。保育園児や職員が仮設団地の住民と交流することで、支え合いセンターとは異なる側面での「見守り機能」を果たすことができている。仮設団地から保育園に通ってくる園児もいますが、「支援者としての役割」を幼児期に体験することで、次世代の防災リーダーが生まれてくることも期待しています。



笑い支援プロジェクトに会場した地域の皆さん

## とり、前へ。



## うに 添う

どへの参加も呼びかけますが、特に男性が集まることができる仕掛けが必要なようです。

避難所に残されたのは、そうせざるを得ない方々でした。東日本大震災では、今も復興住宅への入居が進んでいません。住民の皆さんが仮設住宅での生活から次の一歩を踏み出せるように少しずつ不安を解消していかなくてはなりません。

ある仮設団地では、子どもの遊び場を制限せず、大人があたたかく見守る雰囲気生まれています。住民同士の助け合いがさらに進むといいですね。



日本障害フォーラム(JDF) きょうさん 長崎支部事務局長  
うしじま 牛嶋 輝彦さん

## 東日本大震災の経験 子どもたちへの対応を後回しにしない

昨年5月、益城町総合体育館で避難所運営のサポートをしました。東日本大震災の際、東京YMCAの担当者として石巻で支援を行った経験が少しでも役に立てるのであればとの思いで現地へ向かいました。一方で、災害の状況が異なることから、過去の経験に頼りすぎず、被災者のニーズに耳を傾けることを大切にしました。

避難所ではマスコミ対応と、避難所全体のコーディネートを担当。記者を相手にした囲み取材では、緊張しつつも、熊本の現状を全国に正確に伝えられるよう努めました。活動を終えて群馬に戻った後は全国YMCAに呼びかけ、前震から1カ月後に一斉街頭募金を行っています。

生活の場が、避難所から仮設住宅へと移行した今、大人は生活再建への準備で慌ただしく、子どもへの対応が後回しにされてしまうケースも

考えられます。東日本大震災の際には、日帰りのレクリエーションなど、子どもたちが楽しい時間を過ごすことができるプログラムを実施しました。また、災害による勉強の遅れなどから進学を諦める高校生もいたため、「高校生カフェ」という居場所をつくり、学習支援も行いました。熊本でも、子どもたちが取り残されることのない支援を展開していただきたいと願っています。

熊本地震から一年、被災者のところに寄り添う支援活動を全国のYMCAが引き続き支えています。



ぐんまYMCA総主事  
村上 祐介さん

総主事の  
タラント  
Vol.35



talanton

新たな歩み

新緑の季節です。新しい芽が息吹き、晴れやかな気持ちと希望に満ちあふれ、夢に向かって第一歩を踏み出す季節です。その時期にふさわしく、熊本で11番目のワイズメンズクラブとして、水前寺ワイズメンズクラブが産声を上げました。また、この4月からは、公益財団法人熊本YMCAが代表を務める共同企業体が、玉名市の桃田運動公園の運営を指定管理者として

始めています。さらに、130年もの歴史のある熊本市立熊本五福幼稚園を熊本市より譲り受けることとなりました。YMCAの熊本五福幼稚園として2018年度より運営をスタートします。

熊本の震災からの復興への道のりは始まったばかりです。2017年度から取り組む地域支え合い運動3ヵ年計画のキックオフ活動として、3月に益城、御船、阿蘇で、YMCA会員と地域の皆さんとの交流や意見交換の機会を持ったことは、これからの被災地支援の在り方について考える機会となりました。

YMCAは一年にわたり熊本地震の支援活動を行っています。その中で活躍された方の中には、専門性が高く、キャリア豊富な団体・個人

が多く存在しました。ボランティアという言葉から「アマチュア」のような印象を持たれることがありますが、災害支援を専門とするボランティア団体、いわば、プロ集団による活動に気付いた方もおられると思います。東日本大震災の教訓から、各団体の情報を共有し、ニーズに合った支援を展開する組織の在り方が問われています。

YMCAは、関東大震災、伊勢湾台風、阪神淡路大震災、スマトラ沖地震、四川大地震、ハイチ地震、東日本大震災など、多くの災害で他団体と協力し、復興支援活動を行ってきました。「プロフェッショナルボランティア」として、困難な中にある人々に寄り添い、愛と奉仕の精神を胸に、被災した皆さんと希望を見出しながら、新たな歩みを始めていきたいと思っています。

誰も置き去りにしない支援

安田菜津紀さんはフォトジャーナリストとして、熊本でも取材活動を続けています。東日本大震災から6年。安田さんはどんな思いで災害復興や紛争に向き合っているのか尋ねました。

通っている陸前高田の仮設住宅は「誰も孤独にしない」を目標に、自治会が積極的に活動しています。特に力を入れているのは「コミュニティのつながり」です。入居からすぐに始まった活動が、トマトの苗とプランターの全戸配布。栽培が始まると、みんな水やりと一日に一度は外に出ます。そのうちに成長が楽しみになり、トマトがお隣さんと共通の話題になってつながりが生まれます。何cm伸びたとか、肥料は何を使っているとか、トマトをめぐって会話の輪が広がっていきました。

一昨年前のことです。この仮設住宅で「おとなりのおじいちゃんのTVが一晩中間こえていた」という連絡が入り、住宅内で倒れていたひとり暮らしの高齢者が一命を取りとめたということがありました。「つながり」で命が救われた事例です。

災害で苦しみを背負い続けている人の心を写真で表現することは容易ではありません。人々の関心も徐々に薄れていきます。一方で、仮設住宅に長く留まらざるを得ない人々の多くは何らかの深刻な問題を抱えています。このような人々が置き去りにされている構図が東日本大震災の被災地にも見られます。

時間が経過してからこそ「誰も置き去りにしない支援」が必要であることを取材を通して感じます。熊本YMCAの活動をはじめ、私たちが心を寄せたいのはむしろ“これから”ではないでしょうか。

紛争や災害の被害は高齢者と子どもたちに真っ先に向かいます。子どもから笑顔が消えた社会は豊かな社会とは言えないのではないのでしょうか。その点で言えば、中東で紛争に巻き込まれた子どもたちと、国内で被災した子どもたちに差はありません。

子どもの頃、母の勧めで横浜YMCAのキャンプによく参加しました。YMCAのキャンプには障がいのある子どもたちも毎回参加していました。みんな一緒に楽しい時間を共有したYMCAのキャンプが「心に垣根を作らない」という私の原体験になって、今もフォトジャーナリストとしての仕事に活かされています。

安田 菜津紀さん

1987年神奈川県生まれ。studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けながら、熊本地震の取材も県内各地で行っている。



わたしと聖句

コリントの信徒への手紙1 15章20節

しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。

震災を忘れない

昨年4月14日の夜、私たち夫婦と娘は、益城町の教会兼自宅にいました。娘がシャワーのために脱衣所に向かった直後、「ダーン」という音が響くと同時に、天井、壁、本棚等が次から次へと落ちてきました。とっさに娘の名前を呼ぶと、がれきとなった壁の向こうから「ここにおるよ!! 挟まれて動けん」という声。私たち夫婦は「主よ！ 助け給え」と叫びながら天井を見上げました。すると、なんと壁と天井が二つに割れているのです。まるでエジプトの紅海が分かれたかの

ようでした。「星が見えるよ」とびくりにして妻と顔を見合わせました。

私たちはなんとか脱出しましたが、がれきに挟まれた娘の姿を見ることもできないまま、「大丈夫か!!」と何度も何度も叫びました。地震から約1時間後に救急隊が到着。それから4時間の格闘の末、娘は難を免れました。娘が私たちのところまで運ばれてきた時、「助かったぞ！ 主よ、感謝いたします」と声をかけました。あの時のことを振り返ると、現場に救急車などを何台も停車できるスペースがあったことなど、主の助けがあったことを思います。

教会兼自宅は全壊。礼拝はしばらく熊本市内の信徒の会社の事務室で行い、今は、九州キリスト災害支援センターの事務室をお借りしています。この試練を通して教えられたのは、「いつも死に打ち勝たれた甦りの主イエス・キリストが共にいてくださる」ということです。

熊本東聖書キリスト教会 豊世 武士

発行所 / (公財) 熊本YMCA  
〒860-8739 熊本市中央区新町1-3-8  
TEL 096-353-6397(代)  
発行人 / 岡 成也 編集人 / 富森 靖博  
定価60円 購読料は会費に含む

www.kumamoto-ymca.or.jp



熊本YMCAの使命

共に生きる社会 生涯学習の推進 ボランティア活動  
地球環境の保全 ウエルネス活動 平和な世界

2017年度基本聖句

ヘブライ人への手紙 13章5節  
わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにしない。